

東京農業大（東京）国際食料情報学部食料環境経済学科の学生13人が16日まで3日間、長和町を訪れ、伝統文化や特産品について学んだ。同大の学生は5年ほど前から「山村の再生」などをテーマに継続的に町を訪れており、今回は初めて、獣害対策とジビエ（野生鳥獣肉）の活用を取り上げた。

東京農大生13人 町を訪問

町と東京農大は2008年度から連携し、地域を活性化する方法を学ぶ「山村再生プロジェクト」に取り組んでいる。当初の3年間は文部科学省から補助金を受け、その後も月1回ほど学生が町を訪れて遊休農地の再生方法などを学んでいる。これまでにシカ防護柵の設置をしたことはあったが、今回は町で重要課題の一つになっている獣害対策を本格的に学んだ。

町職員が15日、長久保の長門老人福祉センターで町内のシカとイノシシの捕獲数や柵の設置状況を説明。ここ数年の捕獲数は徐々に増え、12、13年度は年間約1300頭になったという。柵は町全体の農地を囲うと全長約90kmになり、13年度末には約75%に達する見通しだと話した。

プロジェクトの現地指導員でわなで猟をする黒沢勇人さん(56)＝長和町長久保＝は、

獣害対策 長和に学ぶ



実物のくくりわなを使って捕獲方法などを紹介した。「駆除は必要だが、なぜシカが増えたのか、原因をつくったのは人間ではないのか」と思いを巡らせながら、動物をあやめることなどについて考えてほしい」と話した。

学生たちは、地元の猟友会から提供を受けた鹿肉を切つてたれを付けて焼き、町職員

ジビエの調理・試食も

が作った鹿肉入りカレーと一緒に味わった。プロジェクトの学生委員会副委員長の2年岡初音さん(19)は「鹿肉は初めて食べたけれど、思ったより臭みはなかった。都会に住む人にも獣害被害の現状を知ってもらえる機会をつくりたい」。学生は、ジビエの活用の可能性についても話し合った。

15日朝にはどんと焼きをして、前日に作った鱈玉を焼いた。16日はタツタンそばや花豆などの特産品11品目を試食し、町職員と意見交換をした。

鹿肉を切る東京農業大の学生

長和町

東京農大学生が「獣害対策」など学ぶ！

山村再生プロジェクトで地元住民と活動

長和町と山村再生プロジェクト連携を進める、東京農業大学の国際食料情報学部食料環境経済学科学生らは15日、同町長久保の老人福祉センターで獣害対策とジビエ食材

活用について学んだ。同大は平成20年度から農村実習として、長和町をフィールドに遊休荒地の整備などを地元住民と共に活動している。今回は参加希望の学生を募

り14日～16

日の3日間、

地元「おた

や祭り」や

「どんど焼

き」の伝統

行事に参加

したり、獣

害対策など

の実習スケ

ジュールを

実施、1年

～4年の13

人が参加し

た。

学生は二

ホンジカや

イノシシの

獣害被害、括りわなにつ

いて現地指導員・黒沢勇

人さん(56)の説明を受け

る。黒沢さんは「柵など

の物理策も一定の効果が

あるが、絶対という防ぎ

方はないのが現状」とし、

「わなで捕獲した二ホン

ジカをジビエとして活用

しようという考えもある

が、なぜ増えてしまった

のか考えてほしい」と話す。

さらに「一時期増えて

も突然、減少するのが自

然の摂理だということを

忘れないで、自分たちの

生活を見直すことも必要

と、獣害対策とともに社

会生活への疑問も投げか

けた。同大・望月洋孝助

教授は「継続した事業と

して学生たちも経験を積

んで、実態を伴った学習

ができる」と語る。

長和町の担当者は「ジ



括りわなを手話す黒沢さん(写真右)

ビエとして生かすには各市町村単位でなく、広域的に処理施設が必要」とし、「捕獲しながら個体数を残していく方向性」と、学生の質問に答えていた。また、この日は二ホンジカの肉の入ったカレーや焼き肉のジビエ料理を試食した。

学社連携—地域資源生かし町を活性化

人材育成や産業振興の後押し

長和町は人口7000人弱、世帯数2700の中山間の町ながら、恵まれた自然環境、古代からの歴史遺産など、地域資源を生かして町の活性化に取り組んでいる。この中で同町の人材育成や産業振興などの大きな後押しの可能性を持つのが町と明治大学、東京農大の学社連携だ。2校は同町内での学術的研究を進めながら、異なる切り口から町と関わっている。いずれも研究者のアイデアなどが地域を元気づけている。新たな年のスタートに現状と今後を見つめ直した。

長和町と東京農大

山村再生に
アイデア提案

長和町と東京農業大学は、同町を大学の実習地にしながら研究を地域振興に役立てる取り組み「山村再生プロジェクト」で連携。大

学生が地域との交流の中で、伝統文化や中山間地農業などに触れ、山村再生のアイデアを提案している。同大の立岩寿一教授が長和町古町出身であることが縁で長年、同町で東京農大生が実習していた。こうした経緯で平成21年から長久保地区芹沢の荒廃地約

3haの整備活用を行い、同プロジェクトが平成23年から始まった。今年で4年目になる。同大学生や卒業生ら約20人が毎月訪れている。同プロジェクトでは、学生が大門鷹山の「花豆」を生かした納豆や、スモモの化粧品などを研究しており、地域も特産品創出につながる



山村再生プロジェクトの農大、町などの意見交換(長和町提供)



東京農大の長和町のカルタ

たとして、町も手応えを感じている。

今年は宮ノ上に設けた炭焼き窯を活用した間伐材などによる本格的な炭焼きも進む予定。現在、長和町を題材にしたカルタ制作も進んでいる。

同プロジェクトでは、24年5月から丸子修学館高校も大学生と一緒に山村再生に関わっており、地域と大学、高校の連携による活動の深まりにも期待が持たれている。

ことを期待。町全体で取り組みと連携することと視野に、昨年は役場各課の横断的プロジェクト「東京農大連携ワーキングプロジェクト」が発足した。地域の特産品を東京

農大との関わりで都内で発信する「農大フェア」は昨年10月、例年会場の二子玉川の百貨店で2回目を行い、長和町奨励品などを出展。一昨年の初回からのリピート客も一定数あつ